

山に親しみ山に想う (11)

— 駄弁 —

<文・写真> =岡本=

「駄弁」と題したのは、あれこれと心に浮かんできた取り留めのない話を書いてみようとしたからであって、落ちのない落とし噺を聞くようなつもりで暫くお付き合い願いたい。

<ストック>

自分の山歩きにはストックは必需であるし、殆どの登山者も使っている。両手に持つ二刀流の者さえいる。現在はストック流行の時勢であるが、かつてはストックを殆ど使わなかった頃もあったと伝聞する。

登山教本では、ストックの紐の輪に手首を通してしっかり握ること、ストックの長さは登山道の登りでは短く、下りでは長く調節して握るなどとストックの使用要領を書いている。自分の場合は、一刀流のストックを最長まで伸ばして固定し、紐は使わないという方法である。登山道の上りと下りでの長さ調節は、傾斜度に合わせて握りの位置を上下に自在かつ臨機に変えるだけだ。そのためにも紐の輪に手を通さない。登山道の上りが一定傾斜の上りで続くわけではないし、下りも同様である。登山道の傾斜は変幻である。その変幻に合わせて、その都度こまめにストックの長短を調節することは厄介すぎてできない。そうすると、逆にバランスが取り難くなることがおこる。自己流だと、自在に握りの位置を変えて足下の傾斜の変幻に対応できる。修験道の行者も、奥駈けするにも長い一本の棒(杖)を持っているだけだ。

体のバランスを崩しかけて咄嗟の対応を取らなければならない場合、紐の輪に手首を通して



のはどうだろうか。咄嗟の場合には、ストックを離して対応動作を取らなければならない。ストックが手首に絡まっていない方がよいのではないか。自己流だと即座に反応できる。自分はストックの紐に熊除けの鈴を結んでいる。鈴を紐に結びつけると、ザックや腰に付けるより便利なのがある。

<登山者の挨拶>

登山道で登山者同士がすれ違う際には、「今日は」などと挨拶を交わすのがエチケットであり、習慣であると登山教本に書かれている。この挨拶交換には登山を楽しむ者の同志的な意味合いがあるとすれば、電車の中やバス待ちの際にもすべきであるのに山中の登山道であった時だけに挨拶交換するのは、それなりの根拠があるのだろう。山中は人影がないか少ないという隔絶された空間である。そんな場所で登山者同士が遭遇するのである。山中のそんな場所で山賊、追い剥ぎの類が出た時代は、歴史的尺度で見れば最近までであった。そこでお互いに山中を安心して通行するために、危険人物ではないことを告げ会うための方法として挨拶を交わす習慣ができたのではないか。その習慣は、静かで素晴らしい景色に誘発されたものではないと思う。西欧文化の握

手の習慣は、武器を隠し持っていないことを証明するために素手で握手することになったのではないか(この握手の部分は何かで読んだ気がする)。ひと気のない厳しい山道では握手より声掛けの方が適切であるから、握手代わりに声掛けの挨拶が習慣として定着したのではないか。体験から



らいうと、山道ですれ違いざまに交わすのではなく、お互いに少し離れた、距離を置いた状態で挨拶を交わすのが好ましいと思う。こちらから挨拶を投げかけても、黙って過ぎていく登山者には、少し大袈裟だが不気味さ覚える。

単独行の自分が、例えば10名のグループと遭遇した時は、先頭のリーダーには「今日は」と声掛けをして安心してもらい、他のメンバーには適当に目礼だけ数回するだけに止めている。

<車中の不快>

山行の朝、早朝の電車の中で不快なことがある。それは山姿の人の欠伸(あくび)である。常日頃より早い起床なので欠伸がでるのも致し方ないが、問題はそのマナーである。掌で覆わず喉ちんこが見える程大きく欠伸をされると、それは向かいに座っている者にとって、正視できず目を覆うべき惨状である。視線を外して見ないようにする。欠伸をしている人の心身は全く弛緩し無防備である。「欠伸を噛み殺す」という言葉は、若い世代にとって既に死語なのか。

ある時、向かいに座ったアラフォー夫婦の山姿婦人が歯医者なら大満足するほど大きく開けたが、掌で隠さない。皮肉ってやろうと、掌で自分の眼を覆ったのだが、ご婦人は心身弛緩の状態なので気付いてくれる訳がなかった。

マナーは世につれて変化するものだから、欠伸のマナーでとやかく言うべきでもあるまいとの考え方もある。しかし、変なことを言うようだが、大欠伸で口腔を見せるのは、体内の粘膜を見せることであって品の良いものではないのは確かである。せめて、顔を下に向ける位の気遣いが出来ないものだろうか。欠伸についての躰けやマナーは不要の時代になったのだとすれば、単にマナーだけではなく「何か無形の大きなもの」を失ってしまったのではないかと思えてならず、残念である。掌で欠伸を覆う仕草は、消える運命の無形文化遺産になりつつあるのであろうか。

<自戒>

山行を終えて、帰りの電車に乗るなど人なかに戻る際には、その前に登山靴や服の汚れを落とすのがマナーであろう。特に夏の汗臭さを電車内に持ち込まれると、他の乗客にとって大迷惑である。汗臭い登山者の横に座った人は口には出さないが、大変な我慢をしているはずである。登山者だから大目にみてもらえると考えるのは甘えである。自分は親譲りの、人一倍の汗かきである。下山後に温泉があれば入浴し下着を着替えようと思うし、また汗臭さを消す手の平サイズの消臭器があれば携行しようと思う。

(おわり)